

「熊木さん、面白いねえ。見てごらんないよ」

車椅子の有田澄江が、窓の外を眺めながら声を掛けた。

「何がです、何が面白いんです？」

入り口近くのテーブルで、熊木が菓の入ったバッグを覗き込みながら聞き返す。

「葉っぱよ、木の葉っぱ」

窓のすぐ外にブナの大木がある。三階の窓からではてっぺんまで見えない。木の高さは四階の屋上を越えている。

「さっきからねえ、今度はこの葉っぱ、今度こそこの葉っぱって目を付けるんだけど、なかなか当たらないのよ」

風が一吹きするたびにブナの枝が揺れ、その度に夥しい数の枯れ葉が舞い落ちる。

「一度にあんなにたくさん落ちるのに、どうして当たらないのかしら」

「そうか、有田さん。風で落ちる葉っぱの当てっこしてたんだ。それは面白そうだねえ」

熊木は菓と水の入ったコップを手にして、車椅子の脇に歩み寄る。

「有田さん、はい、お菓」

「ありがとう。ねえ、熊木さんもやってごらんないよ」

「よし、じゃあ一度やってみましょう。えーと、えーと、じゃあ僕はあの葉っぱだ」

二人はしばらくブナの木を眺めていた。やがて小さな風が枝を揺るがせ、また夥しい数の葉っぱが舞い散った。

「ほら、落ちた。当たりだ、当たり」

熊木が子供のようにはしゃいで言う「有田さん、一発で当たりましたよ、僕の勝ちだ」

すると、澄江がむきになって言い返した。

「インチキ、インチキでしょ！だって熊木さんがどの葉っぱにしたか証拠がないんだから」

「はっ、は、ばれましたか。有田さん鋭いなあ、今の勝負は取り消し」

熊木は菓のバッグを閉じて肩に掛けると「じゃあ、僕は行きますからね。有田さん、頑張つて当ててくださいね」

そう言つて、笑いながら澄江の居室を出ていった。そして廊下を歩いていくと、澄江の孫の佳代子と出会った。

「おばあさん、どうかしら？」

「元気ですよ。気分も快調みたい。今一人でゲームを楽しんでいますよ」

「えっ、一人でゲームを。どんなゲーム？」

「まあ、行ってごらんさい。単純なゲームだけど、なかなか面白いですよ。ただ、インチキ防止のルール作りが難しいかな？」

熊木は小さく笑って立ち去った。佳代子が部屋へ入ると、澄江はやはり車椅子を窓の方へ向けている。

「おばあちゃん、こんにちわ」

澄江は窓の外に顔を向けたままだ。

「おばあちゃん、何してるの？」  
何も答えない。

「ほら、吹いてきた。落ちろ、落ちろ」

風が吹き、枯れ葉が舞い散り、やがて収まる。

「ありやー、まただめだ」

佳代子はしばらくの間、黙って祖母と窓の外を見比べた。しかし何をしているのか、何がだめなのかさっぱり分からない。『風で飛ばされる枯れ葉を見ているようだけど？』

ようやく澄江が佳代子に気付いて、車椅子をこちらに向けた。

「佳代ちゃん、久しぶりね」

「おばあちゃん、何言ってるの。私一昨日も来たじゃない」

「あれ？富子が来てくれたと思っただけど」

「姉さんはずっと来てません、遠くにいるんだから。もう、せっかく会いに来てこれなんだから。張り合いがない！」

佳代子は憤慨した言い方をしながらも顔は笑っている。

「ところで、おばあちゃん。何一人で楽しんだの？」

「あら、大変。お前が怒ったもんで、何してたか忘れちゃったよ」

「もう、しょうがない」

佳代子は声を出して笑った。

「熊木さんが知ってるみたいだから、聞いてあげて」

「そうか、熊木さんで思い出した。熊木さんがインチキしたんだよ」

そう言っただけ澄江は、何をしていたのか話した。

「私が何回やっても当たらないのにさあ、熊木さんが一度で当たるわけがない。まったくインチキなんだから」

澄江が本気で悔しがっている。佳代子は笑いながら言った。

「じゃあ私もやってみるか」

そして、少しだけ窓を開けた。

「おばあちゃん、今日は暖かいね」

夏の終わりまで無数の葉ですっかり遮られていた日差しが、今は隙間だらけとなった枝を通り過ぎて、心地よい温もりを届ける。また風が吹き、木の枝が揺れて、二人がいる辺りの温もりも揺れた。

佳代子は窓から身を乗り出して下を見た。庭は何本かのブナの大木が撒き散らした落ち葉で、地面が土だったか芝だったかも分から

ないほどに、あたり一面が埋め尽くされている。

「おばあちゃん、庭はもう茶色の海だよ」

「えっ、海だつて？じゃあ、私たちは船に乗ってるのかい？」

「海に木がはえますか？本物の海じゃなくて、一面の葉っぱがまるで海のように言ったんです」

佳代子は噴出すように笑い、祖母の肩にそっと手を置いた。かすかな風が入ってきて、澄江の銀色に輝くほつれ毛が優しくなびいた。

「ああ、驚いた。確かに船にしちゃあ揺れてないものねえ」

そう言って澄江が愉快そうに笑い、佳代子も笑った。そして、また風が吹いた。

「みんなどんどん落ちていくのに、どうしてあの葉っぱはいつまでもしがみついているんだろ。潔くないんだから、まったく」

澄江が独り言のように呟いた。一人ゲームがなかなか上がれなくて、珍しくイライラしている。そんな祖母の背を見ていて、佳代子はほえましく思う。『怒れ、怒れ。元気で何より』

佳代子は、目の前に伸びている枝の一つの枯れ葉に目を据えた。

あれは二週間前に来た時だったかな？――。熊木さんと話したときのことだ。

「おばあさんは海外旅行の経験はあるの？」

「とんでもない。海外旅行だなんて、全然」

「そう。おばあさん、大きな船に乗って、アメリカとヨーロッパへ行ったと話していたけど」

最近おばあちゃんは、どうもそういうことが多くなった。海外どころか、大きな船に乗ったことさえないはずなのに。この間来た時だって、ぽかぽか陽気だったから、久し振りに車椅子を押して外に連れ出してあげようとしたら、『いいんだよ、無理しなくても。毎日出歩いているんだから』って、真顔で言った。本当は誰も連れ出していないのに。

そして、熊木さんは続けて話した。

「おばあさんは幸せな人だねえ。ものを忘れる代わりに、やってないことまでやったって思えるんだから。この間だって、自分は高級ホテルにいるって言ってたよ。僕のことなんか、ボーイだと思っただんじやないかな」

熊木さんが笑い、私も笑った。『ずいぶん老けたボーイだ』

「人ってさ、いい思いしたら、『ああ、自分はいいい思いしたな』って思い返せるから幸せな気分になれるのにさ、それが思い出せなくなったら、何のためにいい思いしてるか分からなくなるよね。僕の母親なんかその口でね、せつかくちよつとした小料理屋へ連れてって美味しいものご馳走してもさ、まあそのときは美味しい美味しい

って喜んで食べるんだけど、二、三日したらすっかり忘れてるんだから。お店に行ったこともだよ。まったく、何のために高いお店で食べたんだって言いたくなるよ」

熊木さんは五十くらいだ。後頭部に地肌が丸く露出し、顔の左半分は五、六個小さなシミがあつて目の下は少したるんでいる。ボーイとはちよつと言ひ難い。『熊木さんのお母さんも八十くらいかな？』  
「私のおばあさんなんかね、いつ誰が会いに来てくれたかなんてすぐ忘れてしまふみたい。この間なんかひどいの。私がトイレに行つて戻ってきたら、『おお、よく来たね』なんだから。ものの五分もたつていないというのによ」

熊木さんはぷすつと吹き出し、「それはひどい、僕はやつぱりボーイだ」

と言つてさらに声を出して笑つた。あまり好きになれない中年の笑い方。『熊木さん、そんなに笑わないで欲しい』

このあと、熊木さんは私の知らないお年寄りさんたちのことをいろいろ話した。

「○○さんはね、△△さんに会いたい、△△さんに会いたいつて言い続けてるんだよ。友人なのか昔別れた初恋の相手なのか分からないけれど、一途に思い続けてるんだね。人に会いたいなんで、一番切なくて切実な思いだよ。恐らくこのままずっと思い続けて、心残りのまゝいつてしまふだろうね」

「○○さんはね、やたら怒りっぽくつて、△△さんのクシヤミが気に喰わないとか、窓からの景色が木しかないとか、何もかもが不快に感じちゃうんだね。不満だらけの人生だったのかと思いきや、とんでもない。海外旅行だゴルフだつて、やりたいことさんざんやつてきたのによ。あれは気の毒だねえ」

「○○さんはね、いつもニコニコしていてね、人の話をニコニコ顔で聞いてるんだよ。自分からは何も話さないから、こつちが言つてることを分かつてニコニコしてるのか分からないけどね。僕は○○さんのニコニコ顔が好きでね。いやなことがあると○○さんのところへ行くんだよ。そうすると必ずあのニコニコ顔に会えるんだよ」

他の人には、私のおばあちゃんのことを「○○さんはね、物忘れがひどくてね。そればかりかやつてもいらないことをやつたつもりになれてね・・・」と話すのだろう。五十人のお年寄りがいれば、五十の「○○さんはね・・・」がある。しかも、熊木さんがほんの数行で言い表してしまふような。

私はそのときふと思つた。『ここは人生の吹き溜まり？私が将来人生を閉じる頃になつてここにいてとしたら（勿論その頃は熊木さんがあるわけではないだろうけど）、どんな「○○さんはね・・・」になつて居るのかな？』

佳代子が我にかえると、澄江は相変わらずブナの木を見つめている。佳代子は祖母の顔を覗き込んだ。もうさっきのイライラはなさそうだ。ゲームはもうどうでもよくなって、ただぼうつと目を向けているだけなのかも知れない。佳代子は気が済むまでそつとこのままにしておいてあげようと思う。

そういえばある作家が言っていたな――。何も読んだことのない作家だけど、『自分は人生の最後に、いい人生だったと振り返られるように、人生を生きるんだ』と。私もそう思う。でも今、現実に人生の終わりを間近に控えたおばあちゃんやここにいる人たちを見てみると、また考えてしまう。『自分の人生は・・・』なんて振り返られるような人は、はたしてどれくらいいるだろう。『作家さん、あなただったら、この現実を見てどう考えます？』

また風が吹いた。小さくせわしく揺れる枝や、ゆったりおおらかに揺れる枝や様々だ。少し強く吹くと、大木まで体を揺らす。

『おばあちゃん、何考えてるの？また、ありもしないことを、勝手にあれは楽しかったなんて思っているんでしょ。若い頃、アイドルスターだった映画俳優と恋に落ちたとか――。いいわねえ』

佳代子は、先ほど何とは無しに目を付けた枯れ葉を探した。相変わらず時折風が吹き、無数の枝がてんでに揺れ、そのたびに数え切れないほどの枯れ葉が舞い散る。佳代子はどうしても自分の枯れ葉を見つけられない。『もう、落ちてしまったのかな？』

一番目を付けやすそうな、目の高さの枝を一つひとつ丹念に辿ってみるがだめだ。『ゲーム終了かな？』

しばらく風が収まり、全ての葉が動かなくなったあとに、佳代子が探していた辺りで、一つの枯れ葉が潔くきつぱりと落ちた。『あれにしておけばよかった』

そして諦めかけたとき、一本の枝をじつと眺めていて、佳代子は見つけた。どの枝にも、ここからでは針のようにはか見えない細い無数の枝が数センチほど伸びていて、その先端に小さな、米粒よりもっと小さな白い粒々がついている。佳代子は思わず車椅子の取っ手を握り、力を込めた。

「おばあちゃん、ほら、よく見て。新しい命が始まるうとしているよ！」

佳代子が視線を落とすと、澄江の白い頭が右の方に少し傾いている。佳代子は微笑みながら年老いた祖母の顔を覗き込む。